

CT（コンピュータ断層撮影）の画像など検査情報を大容量の伝送システムで各分野の専門医に送って診断してもらい、効率的な医療をめざすネットワークづくりが香川医科大学医療情報部（原宏教授）を中心に広がっている。離島、山間部などでの専門医不在による医療の地域格差をなくし、高齢者や妊婦の在宅健康管理も手掛ける。I-T（情報技術）時代の医療システムだ。（坂口至徳）

▲先端医療の現場▽⑨

遠隔診療

全域カバー

事故で頭の骨を折った六十歳の男性が香川県下の民間病院に運び込まれてきた。頭蓋骨内で出血しているらしいが、CT（コンピュータ断層撮影）画像を撮ったものの、病院に脳外科の専門医がおらず、詳細な診断ができなかった。そこで香川医科大学に画像を送り、専門医が見たところ、血腫がみつかり、急ぎよ脳外科手術ができる他の病院に転送。患者は緊急手術で救われた。

このように香川医大に送られてくる画像は年間二百枚を超える。

医療ネットワークは、高度に専門分化する医療を地域で分担して効率よく進めようというシステム。診断は治療の方針を決める出発点となるだけに、できるだけ多くの情報が必要だ。さらに検査の重複を避けることもできる。

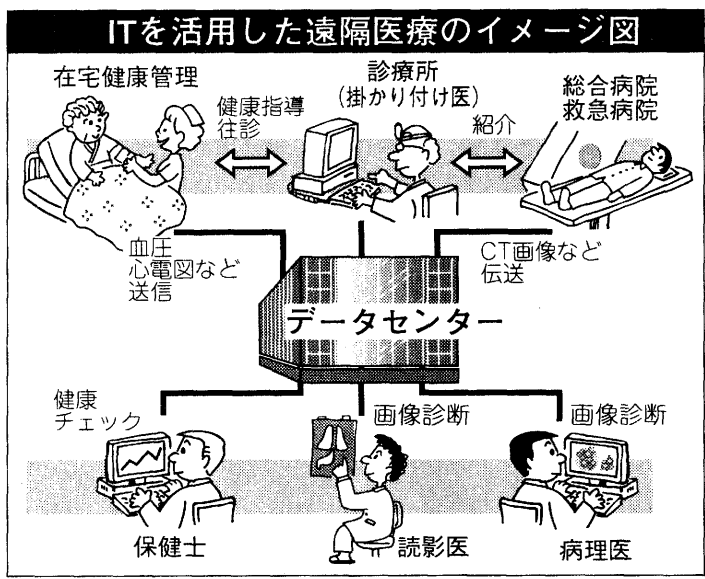
「最近、CT、MRI（磁気共鳴画像装置）など高度な医療機器が一般の病院で導入されています。それにもない、脳血管が破れそうな状態にあることがわかるなど診断の技術も高度になっていて、専門の診断医がいらないとわからないケースがあります」と原教授は説明する。CT装置を持ちながら、使うことが比較的少

I-Tが医療格差を解消

ない病院に撮影を発注しておき、診断は別の病院に依頼するなど連携がとれるわけです。

ネットワークは香川県全域が医療ゾーンのように結ばれている。香川医大にデータの仕分け役をするデータセンターがあり、▽患者を最初に見る病院や診療所▽専門的な治療をする総合（救急）病院▽画像を見る読影医や病理医のもとにそれぞれネットがつながっていて、この間をデータ

遠隔診療のデータベースを手エックする原宏教授（香川医科大学）



が行き交い、患者の病状の説明や診断が画像を見ながら行うことができる。

香川医大 離島も結ぶネットワーク構築